

平成 21 年 4 月 13 日現在

研究種目：若手研究(B)  
 研究期間：2005～2008（2007 年度は育児休業のため中断）  
 課題番号：17730310  
 研究課題名（和文）農山漁村における家族ライフスタイルについての実証的研究  
 研究課題名（英文）An Empirical Study on Family Lifestyles in Rural Areas  
 研究代表者  
 片岡 佳美（KATAOKA YOSHIMI）  
 島根大学・法文学部・准教授  
 研究者番号：80335546

研究成果の概要：本研究では、農山漁村の家族ライフスタイルについて論じることを目的に、島根県の中山間地域において質的調査（農林漁業従事者とその家族を対象にしたインタビュー調査）と量的調査（無作為抽出法による質問紙調査）を行なった。二つの調査データの分析を通して、今日の農山漁村では、家族集団よりも個人を優先するという「個人化」が進展しているのではなく、個人の自由と家族集団のまとまり維持が矛盾せず同時に追求されて家族ライフスタイルが作り出されることを示唆した。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	1,200,000	0	1,200,000
2006年度	1,400,000	0	1,400,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	270,000	3,770,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学(F)家族

キーワード：家族ライフスタイル，中山間地域，農村部，島根県，個人化，集団としての家族

## 1. 研究開始当初の背景

高度情報化時代と呼ばれる今日、これまでの「家族はこうあるべき」という規範は相対化されつつある。家族生活はいわば個人のライフスタイルとして自己実現の手段の一つとなり、その結果家族は多様化してきている。しかし、家族ライフスタイルは、たんに個人の問題として済まされるものではない。個人が自らの価値や選好に基づいて何らかの家族ライフスタイルを選択しようにも、他の家族成員の合意や協力がなければそれは実現

しないからである。したがって、家族成員間での「家族ライフスタイルの共同選択プロセス」の追究こそが重要である。こうした視点からの実証的研究は、本研究の開始当初では、どちらかと言えば都市部の家族が対象になっていることが多かった。農山漁村でも家族における「個人化」が起こっていることを示す先行研究は見られるが、個人の選好に基づいた家族ライフスタイルがどのように作り出されているかについて議論したものはほとんどない。そこで、本研究では、これま

であり注目されなかった農山漁村での家族ライフスタイル選択の問題に焦点を当てようとした。

## 2. 研究の目的

集団よりも個人を重視する傾向が強くなっていくことは、農山漁村の家族成員たちやかれらがつくりだす家族ライフスタイルにどのような影響を与えるのか。本研究では、そうした点を質的・量的調査から実証的に明らかにすることを目的とした。

## 3. 研究の方法

### (1)質的調査（インタビュー調査）

インタビュー調査は、農山漁村で暮らす人びとの家族生活や地域生活について質的に議論することを目的に実施された。実際に農山漁村家族と接することを通してわれわれは、今日の個人主義や近代化の動きについて考えるうえで非常に示唆的な情報を得ることができた。調査の概要を以下に示す。

#### ①時期

2005年8月から2006年1月にかけて実施。

#### ②対象

島根県内の農林漁業従事者の11家族を対象。後継ぎ農家のほか、I・Uターンや家族経営協定のケースも含まれるように調査対象者を選出。選出にあたっては、ふるさと島根定住財団、島根県川本農林振興センター、隠岐の島町役場などの協力を得た。

なお、本調査の事例は、主たる職業については農業・林業・漁業と網羅しているものの、居住地に関しては農山村地域に偏っていることをあらかじめ断っておきたい。また、今回の事例では、1つを除くすべてが過疎地域のものであることに注目されたい。

#### ③方法

調査員はチェックリスト（仕事、家族、地域、人生観などについての質問項目を含む）に基づきトピックを提示するにとどめ、調査対象者になるべく自由に話をしてもらうようにした。可能なかぎり二人以上の家族成員の話を聞いた。調査は、1家族あたり平均3時間を要した。

### (2)量的調査（質問紙調査）

インタビュー調査によって、農山村地域では、家族集団としてのまとまりが生活の適応手段としてみなされるために、それを維持する戦略として個の自由が尊重されるという仮説が導き出された。この仮説を量的なデータを用いて統計的に検証するために、質問紙調査を行なった。この調査ではさらに、農山

村に暮らす人びとの、個人のライフスタイルや生きがいについての傾向をつかむことも目的とした。調査の概要を以下に示す。

#### ①時期

2006年12月に実施。

#### ②対象

島根県雲南市に居住する20歳以上の男女。選挙人名簿から無作為抽出法により2,000人を選出した。

#### ③方法

郵送による配票・回収。回答は自記。

#### ④回収率

有効回答票数は1,079票、有効回収率は54.0%であった。

### (3)研究対象について

本調査研究全体としては、対象とした地域が結果的に農山村に偏ってしまった。そのため、これらの調査データからは漁村の実態を十分つかみきれないという問題があることを断っておかなければならない。2005年度のインタビュー調査においても、漁業従事者の家族生活は農業従事者の家族生活と十把一絡げにしては議論できないことが示唆された（たとえば、仕事に出かける時間の違いや、家族が互いに顔を合わす時間の違いなどは、家族ライフスタイルにも大きく影響してくるだろう）。したがって、本調査研究が今回呈示できるのは、農山漁村というよりは農山村（または中山間地域）の家族についての分析結果および考察というのが適切であるだろう。しかし、そのぶん、中山間地域としての農山村の特徴をインテンシヴに捉えることができた。

とはいえ、本研究での議論は、今後漁村の家族生活を詳しく調査するさい、検証に値する仮説となりうると考える。

## 4. 研究成果

### (1)家族集団のまとまりの重視

家族集団のまとまりは、農山村での生活に適応するための手段として、非常に重要とされていることが明らかになった。とくに、農山村では近隣の人びとが助け合って生活することが重視されており、また、近隣付き合いは家族が単位となって行なわれるものと認識されていることから、近隣との関係のために家族集団が一つにまとまっていることが生活していくうえで欠かせないこととされる傾向がある。このことから、農山村では、家族集団のまとまりの維持を第一の条件として家族ライフスタイルが選択・生成されていることが考えられる。

## (2) 集団のまとまりを維持するための「個の尊重」

農山村の人びとにとって、個々の家族成員を自由な一個人として尊重することは、家族集団のまとまりを重視することと必ずしも矛盾しないと考えられる。今回の調査データからは、人びとは、家族集団のまとまりを生活の適応手段として重視するからこそ、それを安定的に維持するために個々の家族成員の自由を尊重しあうことが示唆された。個の尊重は、集団のまとまり維持のための方策とされていると言ってもよいだろう。

確かに、家族が個人のライフスタイルとして選択される社会について論じる先行研究でも、家族成員を個として尊重することと家族集団のまとまりを強調することは矛盾しないという見解をとっている。ただしそれは、「個人の自由の追求が他者への共感や配慮を生じ、それが新しい連帯のきっかけとなる（個人の自由→家族集団のまとまり）」ということを論じている。しかし、今回の農山村の調査データでは、「集団としての家族のまとまりが重視されるために、個人の自由が尊重される（家族集団のまとまり→個人の自由）」という逆向きの因果関係が成り立つ可能性が示された。そうした点に、農山村の家族ライフスタイルの特徴が見いだされると言えるのかもしれない。

## (3) コンヴォイとしての夫婦

農山村の人びとのよりよい暮らし（ウェルビーイング）に家族ライフスタイルがどのように影響するのかについて検討するため、生きがいの実感と夫婦関係との関わりについて調べた結果、夫婦で生きがいを共有していると答える人は、抽象的で「在ること」に関することがらを生きがいと考えていることが示された。一般に、生きがいは、具体的な何らかの活動（たとえば、目標に向かってがんばること、達成すること、趣味や勉強に没頭することなど）として言及されることが多いと考えられるが、夫または妻との家族生活（結婚生活）を通して生きがいを見いだす人は、むしろ活動的でないことがらを生きがいとする傾向がある。つまり、それらの人びとが夫や妻と共有する生きがいは、必ずしも夫婦共同で何か具体的なことをすることではないということである。

このことについては、かれらにとって夫や妻が、長期的な関わりを通してかれら自身が相手にとって唯一無二の存在であること（言い換えれば、自己の存在意義）を確認させてくれる「道づれ（コンヴォイ）」となっていると考察した。そのように考えると、かれらの結婚生活は、何かをすることではなく、ただ互いに存在することで生きがいの実感をもたらすものとなっているとも言えるだろう。

う。

今回の調査データでは、夫婦で生きがいを共有していると答えた人の割合は、共有していない・分からないと答えた人の割合よりも大きかったが、このことが農山村の特徴であるかどうかは今回の調査データでは明らかにならない。ただ、今回の調査対象である島根県の中山間地域の人びとにとって、こうした「在る」ことで生きがいを感じるものが、かれらのつくりだす家族ライフスタイル（あるいは、その下位概念である夫婦ライフスタイル）に起因しているということが示唆される点は興味深い。

## (4) 高齢社会としての農山村

質問紙調査のデータ分析では、年齢（世代）の変数が家族ライフスタイルに大きく影響しているということが示唆された。このことが農山村に特徴的な傾向なのかどうかは、今後都市部での調査結果と比較して検討する必要がある。しかし今回の調査において、高齢になるほど、夫婦間での葛藤解決方法が性別役割規範から自由になっていくこと、また、家族内で個人の自由を尊重することと家族集団に対する義務を強調することが両立することが見いだされた点は注目すべきであろう。農山村では高齢化が加速している。高齢者の特徴がそのまま農山村の特徴になることは十分に考えられる。

ただし、年齢（世代）の変数が効いていたということがどういうことなのかという問題が残っている。これについて追究する必要がある。

## (5) まとめ

以上のように本研究は、今日の農山村の家族ライフスタイルは、個人化についてのこれまでの議論（“第二の近代”や“家族の本質的個人化”へ向かって進んでいくという議論）の枠組では説明しきれないところが多くあることを示唆した。農山村では、個人の自由も家族集団という一つのまとまりも同時に重視される。また、個人の生きがいにとっても、家族（夫婦）という他者が重要とされる。これが、極端な方向に行き過ぎた個人主義の問題を解決するための新しい共生のありようを呈示するものとなりうるのかどうか。より精緻なデータに基づく分析によって検討することが残された課題である。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

①吹野卓（研究協力者）・片岡佳美，「生きがいとは何か：中山間地域の課題としての『生きがいづくり』再考」，『島根大学法文学部紀要：社会文化論集』，5，19-28，2009年，査読無。

②片岡佳美・吹野卓（研究協力者），「農村家族における結合パターンに関する数量的分析：島根県中山間地域での調査データを用いて」『島根大学法文学部紀要：社会文化論集』，4，31-39，2007年，査読無。

（<http://sir.lib.shimane-u.ac.jp/metadb/up/bull.pl?id=6534>）

③片岡佳美，「農村部における『家族の個人化』についての一考察：島根県中山間地域の事例研究」，『家族社会学研究』，19(2)，32-44，2007年，査読有。

〔学会発表〕（計4件）

①別木久美（研究協力者），「『地域社会』議論の課題：農山漁村の地域社会の変化をとおして」，第57回関西社会学会大会，2006年5月27日，金沢大学。

②片岡佳美，「農山漁村家族の家族ライフスタイル選択と個人の自由：島根県でのインタビュー調査の結果から」，第57回関西社会学会大会，2006年5月27日，金沢大学。

③岩野涼（研究協力者），「家族経営協定の実践とその困難：島根県でのインタビュー調査の結果から」，第57回関西社会学会大会，2006年5月27日，金沢大学。

④本間英雄（研究協力者），「U・Iターン者にとっての農村地域社会」，第57回関西社会学会大会，2006年5月27日，金沢大学。

〔その他〕

報告書

①片岡佳美編『農山漁村における家族ライフスタイルについての実証的研究 2008年度調査研究報告書』，2009年。

②片岡佳美編，『農山漁村における家族ライフスタイルについての実証的研究 2005年度調査研究報告書』，2006年。

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

片岡 佳美 (KATAOKA YOSHIMI)

島根大学・法文学部・准教授

研究者番号：80335546

### (2)研究協力者

吹野 卓 (FUKINO TAKASHI)

島根大学・法文学部・教授

研究者番号：70228873

別木 久美 (BEKKI KUMI)

島根大学大学院人文社会科学研究科修士課程（当時）

岩野 涼 (IWANO RYO)

島根大学大学院人文社会科学研究科修士課程（当時）

本間 英雄 (HONMA HIDEO)

島根大学大学院人文社会科学研究科修士課程（当時）

藤原 幸香 (FUJIWARA SACHIKA)

島根大学法文学部4年生（当時）